

25 久部川の水止め

伝承地：新里町久部地区

参考書籍：31



(水の枯れている久部川)

新里の久部を流れる川を久部川という。源を鞍掛山と半蔵山の溪谷から発し、りんりんとした清水は、大きな岩を洗い山をつたって栗谷・久部・山王と流れる。

この川のほとりは、大むかしより、開けており、ここの住民は、長い間、久部川の恵みを受けていたのである。

むかし、この川辺の久部に老婆が住んでいました。村中一といわれるほどの物持ち婆さんであって、何不自由のない暮

らしをしていました。しかし、この婆さんは、若いうちからケチで、倒れてもただは起きないという人でした。また、自分の幸福以外は何も考えない、人の道も、義理も、人情も気にしない人でした。「川端のお婆さん」といえば、その地方で知らぬ者がいないほどでした。

ある日、老婆が機織りをしていると、一人の老僧が来て一杯の水を求めました。身には破れ衣をまとい、汚れた脚絆をはき、ぞうりのひももゆるんでいました。しわだらけの手には、珠数をかかけ、一本の杖で体を支え、誠にあわれみえる老僧でした。しかし、日やけた顔には犯しがたい威厳がありました。老僧は、かれた声もあわれげに、しかもたいそうていねいに老婆に頼みました。「私は大谷より日光へ行く者です。のどがかわいたので、なにとぞ一杯の水をめぐんでください。」老婆は、機織の手も止めず、たいそうじゃけんな声で、「お前のような乞食坊主に井戸の水はもったいない。下を流れる久部川の水をすくい、勝手に飲むがいい。」と言いました。老僧は、再三、再四のどのかわきを訴えましたが、老婆は、聞こえぬ様に、返事さえしませんでした。さすがの老僧もその無情に怒りを発し、久部川に降り、もっていた銀杏の杖で呪文を唱えながら、川を三度うち、「秋冬6か月は、水は川床の下を流れよ。」という、不思議なことに、今まで流れていた清水は、川床の下に入って流れ、川底は川原となってしまいました。しかし老婆の家の下流20間の所からは、またもとの川床の水が流れているので、余りの驚きと恐れに老婆は、ただ呆然と老僧を見送りました。そして僧は、その杖を路傍に立てて去ったのです。この老僧こそ弘法大師であり、後で知った老婆の驚きと後悔は一通りではなく、以後、改心して、生まれ変わった様に善女となり、善行功德を施して一生を終わりました。なお、今もこの川の水は、その所だけ半年間は川床を流れています。また、杖の銀杏は、数年後、太い乳房の大木となり、乳飲み子にのみせる母乳が出ない時、乳房の銀杏の木の下にあるお地藏さんに石をあげて祈願すると、たちまちにして、母乳が出るようになったといわれています。

